武田雑兵伝

井口朝生

その主戦力として勇猛をもって鳴る武田軍団の底辺を
支える無名戦士たちの愛と哀しみの日々

渾身の歴史長編

武田雑兵伝

井口朝生

光風社出版

武田雑兵伝

昭和六十二年七月十五日　印刷
昭和六十二年七月二十日　発行

定価　一二〇〇円

著者　井口朝生
発行者　深見兵吉
発行所　光風社出版
東京都文京区関口一-三十二-四
郵便番号一一二
電話番号〇三(二〇四)二四四一
振替東京八-一二九一三

印刷　大盛印刷
製本　越後堂製本

◎乱丁、落丁の場合はお取り替えします

1987 © T.IGUCHI　Printed in Japan

武田雑兵伝

装幀　玉井ヒロテル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

ぬいさまが嫁に行く。そんな莫迦なことがあるものか！

角蔵は得体の知れない烈しいものに煽られて、力まかせに薪割をふりおろした。生乾きのかなり太い櫟（くぬぎ）の根株が、真二つに裂けて左右へ跳ね飛んだ。

「うぬら、勘弁できねえ」

角蔵は眼を怒らせて、根株の片割れにあゆみよると、また力まかせに薪割をふりおろした。

ぬいさまが嫁に行く。屋敷にいなくなる。この里から姿を消してしまう！

角蔵はさらに、もう一つの根株の片割れにあゆみよって、薪割をふりかざした。双肌脱ぎになった上体の肩や腕に、筋肉が盛りあがった。

「畜生っ、勘弁できねえ」

根株がふたたび真二つになって、遠くへ跳ね飛んだ。菜園でみみずをついばんでいた鶏が、いきなり飛んできた根株に驚いて、逃げ散った。鶏の騒々しい羽ばたきや鳴声は、広い屋根のひっそり閉とした裏庭を、一層しんとした感じにした。角蔵にはそう思えた。

「ふーむ」

角蔵は唸った。それから櫟の切り株を幾つも並べると、やりきれないものと格闘するかのように、がむしゃらに薪割をふりあげふりおろした。

「阿呆が、どうだっ、こいっ、莫迦っ垂れ、糞っ」

ありとあらゆる悪態が口から飛びだし、あたりに薪が散乱した。そして角蔵が息をついたとき、納屋の陰から、年若い娘があらわれた。
角蔵は、はじかれたように、娘へ向き直った。何か言おうとしたが、急にはことばがでずに、ただ口をもぐもぐさせた。日焼けした顔が上気すると、赤黒く見えた。
「何を憤っていたの？」
娘はとがめる眼で訊いた。
「なんにも、憤っちゃ、いねえ」
角蔵は口ごもった。
「じゃ、何をしていたの？」
「薪を割っていた」
言ってから、
「きょうは、屋敷へ薪をこさえにくる日だもんな」
角蔵はやっと平静を取り戻して言い直した。
「穢いことばを、口にするもんじゃないって教えたでしょ」
角蔵は曖昧に「うん」とうなずいた。
「早く着物の袖をとおしなさい。その恰好は何っ！」
十五歳の娘にきめつけられて、二十歳の若者は逞しい上体を継ぎはぎだらけの野良着に匿した。
「紫しめじを持ってきたのね」
「おふくろが、持って行けといったんだ」

「誰が採ったの？」
「きのうの夕方、蜂巣山へ粗朶（そだ）を折りに行った帰りに、おれが見つけて採ってきた」
この屋敷の裏庭から見える岡とも小山ともよべそうな丘陵である。
「まだあった？」
「いっぱいある」
「そう」
娘はきらきらする眼で蜂巣山を眺めてから、
「わたしをつれて行ってよ」
「ほしけりゃ、もっと採ってくる」
「つれて行きなさい」
「おれは薪を割らなけりゃなんねえ」
「角！　わたしのいうことが諾けないの!?」
「嬢さま」
「赤手さまってよびなさい」
「ぬいさま――」
すると娘は、角蔵の鼻先へ左腕を突きつけた。掌のない左腕であった。手首に赤い布が巻いてあった。
「あ、あか手さま」
角蔵は顔をゆがめた。

「そう、角は生涯、赤手さまのけらいなのよ。わたしは約束を忘れないから」
娘はそして、
「蜂巣山へつれて行きなさい」
容赦ない語気で、若者に命令した。

ぬいさまが赤手さまとよばれるようになった痛ましい出来事について、彼女自身は、ほとんど記憶がなかった。
ぬいは甲斐といっても釜無川の上流、信濃との境に近い、八が岳南麓にひろがる台地の小集落白坂の郷主、笹尾四郎兵衛頼久の娘である。
笹尾頼久は、今は武田に臣事しているが、古来、この地域に土着して「津金衆」とよばれている武士団の支族であった。甲府から津金衆に動員令が達せられるたびに、笹尾頼久は白坂集落の壮丁(そおてい)を、そのときの軍令で指定された人数だけつれて、出陣した。
角蔵の父吉太も、若年から笹尾頼久に従って、再三、合戦にでかけたことのある里の勇者であった。
ぬいが二歳、角蔵が七歳の永禄二年夏には、武田軍が越後へ進軍するかと思うと、越後の兵が信濃へ侵入するという戦乱があった。笹尾頼久はこのとき、武田の軍令により、里の壮丁を残らず引きつれて信・越へ出陣した。
留守の女たちも、田の草取りや、菜園の大根蒔き、山畑の麻蒔き、そば蒔きと多忙な季節であった。どこも人手が足りなかった。角蔵の祖母は、笹尾屋敷で、ぬいの子守りをたのまれた。祖母は角蔵にも、嬢さまの遊び相手をしろと言いつけた。腕白小僧には、まだ舌も回らないよちよらあるきの女の

児の相手なんか、少しも面白くなかったが、それでも角蔵は毎日、早朝から日暮れまで、祖母と一緒に笹尾屋敷へかよった。

晩夏になったころの或日の夕方、角蔵は笹尾屋敷の裏木戸を脱けだして、近くの小川へ蛙を捕りに行った。ぬいがついてきた。角蔵が「けえれっ」と睨んでもついてきた。転んでも泣かずについてきた。

祖母が裏木戸へでてきて、嬢さまをよんだ。ぬいは祖母の方へ戻りながら、草むらに転んで、こんどは急に悲鳴をあげた。異様な泣き方であった。祖母が駈けよって抱きあげた。ぬいの左手首に黒い紐が巻きついていた。そして角蔵は、祖母が血相を変えて、鎌で嬢さまの手首を、黒い紐もろともに切断した瞬間を目撃した。

「嬢さまが蝮に嚙まれましたっ」

祖母は失神したぬいを抱いて屋敷へ駈けこんだ。笹尾頼久の妻女も、手首から血を噴きだして、ぐったりしたままの娘を見ると、気を失った。角蔵は、祖母が気丈に、ぬいの細い手に血止めをするのを見守りながら、胴震いをしていた。

翌日から、祖母は家に閉じ籠ってしまった。角蔵も外へ遊びに行くことを禁じられた。母のしげが、毎晩こっそりと笹尾屋敷へでかけた。しげは家に戻ると、祖母や、角蔵の二人の姉と、遅くまで何か低く話しあっていた。二人の姉はめそめそ泣いてばかりいた。

十日ほど立って、笹尾頼久が白坂郷の壮丁をつれて帰郷した。角蔵の父も帰ってきた。その夜、祖母は先に亡くなった祖父の墓の傍で、首をくくった。嬢さまの左手から掌を切り落したことを詫びるためであった。

笹尾頼久は、角蔵の祖母の死を悼んでくれたが、笹尾屋敷の者や、里の人々は、その後も角蔵の一家に冷かった。殊に角蔵の評判は悪かった。嬢さまの災難は、この腕白のせいであるかのように陰口された。白坂の子供は、誰も角蔵と遊んでくれなかった。角蔵は孤独な淋しい歳月のうちに、ひどく無口で内気な少年になった。

永禄五年十一月、武田軍は関東へ進撃することになった。笹尾頼久は四人の壮丁をつれて出陣した。里の壮丁の軍役は交替制で、角蔵の父の吉太はこのとき、白坂に残留する番であったが、志願して従軍した。一家に注がれる里人の理由ない非難を、そうすることで、多少とも和らげたいと思っていたようである。

武田軍は、上野、武蔵で上杉の属城を攻略したが、吉太は武蔵松山城の攻防戦で討死した。年が明けて、白坂へ帰ってきた笹尾頼久は、吉太の遺族に焼畑を与えた。角蔵にも目をかけてくれた。

角蔵は笹尾屋敷へ、雑用の手づだいに行くようになって、三年ぶりに嬢さまに会った。

ぬいは掌のない左手首に、いつも赤い布を巻いていた。他の色の繃帯はなぜか嫌った。わたしのおててはあかい。そう言って、無邪気に人に見せたりするので、頼久が赤手と愛称をつけた。ぬいがそうよばれると、よろこぶところから、屋敷の者も、赤手さまとよぶようになった。

赤手さまは角蔵にすぐなついた。角蔵がなんでも言うことを諾くからであった。やがて赤手さまは、この年上の少年をいじめるというたのしみを覚えた。

「ひばりの巣を捜しておいで」

赤手さまの命令で、角蔵は小半日も麦畑を這い廻ったことがあった。ようやく巣を捜して持って行くと、赤手さまは命令したことなんか忘れていて、角蔵をこっぴどく叱った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そんなことをしたら、ひばりが可哀そうよ」
赤手さまは柿の実を、わざと井戸に落して、角蔵に言いつけた。
「拾ってごらん」
角蔵がためらうと、
「拾ってきなさい」
赤手さまは残酷な眼で迫った。角蔵は本当に井戸へはいろうとして、屋敷の下男に抱き止められた。
こうした意地悪をするくせに、角蔵が二、三日も屋敷へ訪れないと、赤手さまが機嫌が悪いからと言って、下男が迎えにきた。
角蔵は赤手さまのお供をして、屋敷の裏藪へ、熟れた烏瓜を採りにでたことがあった。里の悪童たちが、よってたかって囃し立てた。
「女のけらいは意気地なし、角蔵まらなし、ふぐりなし」
少年にとっては耐え難い罵倒であった。羞恥と怒りとくやしさに、角蔵が真赤になると、赤手さまはちょっとびっくりしてから、すぐ悪童たちをねめ廻した。
「角をいじめる子は、ははさまに言いつけて、お仕置きしてやるから」
そして悪童たちを追い払うと、角蔵に訊いた。
「角はわたしのけらいになるのが厭なの？」
「厭じゃねえ」
「じゃ生涯、けらいになるって約束しなさい」
「うん」

赤手さまは満足そうにしてから、また訊いた。
「まらなし、ふぐりなしって何？」
「まらやふぐりがねえのは女だ」
「角にはあるの？」
「ある」
「どこに？」
角蔵はそのとき、どう答えたか今は覚えていない。

或日、ぬいはみなに、自分のことを赤手さまとよんではいけないと宣告した。角蔵にも禁じた。そうよばれることに引け目を感じる年齢になったのである。
笹尾屋敷の嬢さまに還ったぬいは、そのころから、両親について読み書きや、行儀作法を学ぶようになった。不自由な片手で針仕事や手料理の作り方まで、母から習った。
ぬいは自分が教わったことを、一々、角蔵に教えた。角蔵は脚のしびれるのを我慢して、手習いをしなければならなかった。おかげさまでまがりなりにも文字を覚えたが、行儀や作法には困った。
もっと静かにあるきなさい。そのおじぎは何？　井戸水を無駄に使うと水神さまの罰が当るから。着物はきちんと着なければ。爪を切りなさい。また手洟をかむ！　箒はこう持つのよ。
ぬいはやかましいお師匠さまであった。角蔵は迷惑しながらも、しかし、やはり素直であった。これまでは諦めに似た気持で、習慣的に服従していたが、いつの間にか、ぬいの言いつけを守り、命令を諾くことに、ひそかなよろこびを感じるようになっていた。

二人の姉が相次いで他家へとつぎ、角蔵は一家の働き手として、母とともに畑仕事にでなければならなくなった。笹尾屋敷から足が遠のいた。それでも十日に一度、半月に一度というぐあいに雑用をたのまれた。ぬいに会えることがうれしくて、角蔵は笹尾屋敷の用事はいかなる場合も熱心に働いた。

笹尾屋敷から、紅白の餅が届けられたのは、去年の春のことであった。角蔵はぜいたくな糯米で搗いたきれいな餅に目を丸くした。一体何ごとであろうと訝ると、母が笑いながら言った。

「嬢さまが一人前の女になったお祝いだよ」

角蔵のこころは、ゆれ騒ぎ、ふくれあがった。居ても立ってもいられない情感を持て余して、その日は終日、山畑で背骨が曲るほど鍬をふるった。母のしげが、こんなに丹念に耕した畑に、麻を蒔くのはもったいないと言った。

角蔵は笹尾屋敷へ行っても、ぬいに落着いて会えなくなった。ぬいが別人のようにつんと澄ましているし、角蔵の方も、ときたまよばれて傍にいると、息苦しくて逃げだしたくなるからであった。

角蔵は離れたところからぬいを盗み見して、嬢さまがこれほど美しいことに、今まで気づかなかった自分を、ふしぎに思った。

ぬいは雪のように色白であった。きらきらする双眸は、とても眩しく、まともに見られたものではなかった。長い濡れたような黒髪を、きれいに梳いて、いつも房々と束ねていた。姿も際立っていた。それは八が岳高原の清冽な空気と日光と露に育った山芍薬の印象であった。

角蔵はしばらく笹尾屋敷からよばれないと、ふさぎこんだり、苛ら立ったりした。雑用をたのまれると、よろこび勇んで笹尾屋敷へでかけた。ぬいの姿を垣間見ただけで、ふさぎの虫は消え、苛ら立ちは治まった。この半年ばかりはそんなふうであった。

きょうは朝から薪割をたのまれていた。ついでに紫しめじを台所へ届けると、笹尾頼久が囲炉裏端へでてきて言った。
「ちょうど今夜は客がある。茸汁でもご馳走しよう」
「そんなら、もっと採ってきましょうか」
「客は二人か三人だから、これだけあればたくさんだ。ぬいの縁組のことで相談にくる」
「嬢さまの縁組!?」
「ぬいを嫁にやることにした。津金衆の志仁家からでて、小山田信茂さまに仕えている千場弥五郎という侍に、輿入れすることになろう」
頼久のことばに、角蔵は息を殺した。顔は血が一たん引いてから、逆上して、耳鳴りがした。

なだらかな丘陵の路を辿りながら、ぬいが言った。
「熊がいるかもしれない」
「熊はこんな場所にはでねえ」
「もし、いたらどうするの?」
「いやしねえ」
「きのう下之郷の牧に熊がでたので、源次が鉄砲を借りにきたよ」
二里も奥の集落のことである。
「源次は明日、熊を撃ちに行くといっていたけれど、その熊がこの辺にきているかもしれない」
「熊はいねえが、熊ん蜂なら日溜りに、まだ生き残っているかもしれねえ」

角蔵は言った。昔から蜂が多いので、蜂巣山とよばれている丘陵である。
「蜂は嫌い。熊より厭っ」
そして、
「刺されたら大変よ。お嫁入り前の体だもの」
ぬいが言った。角蔵はそれこそ蜂にでも刺されたように眼をつむって歩を停めた。ぬいが口にした嫁入りということばが、胸に痛かった。
「早くおいで」
うながされて眼を開くと、ぬいはかなり先の坂路を身軽に辿っていた。ぬいの後ろ姿の背中にゆれる黒髪を、角蔵はひたと見すえて、あとを追った。
丘陵の尾根に登ると、視界が急にひろがった。西北に八が岳、東南に茅が岳の秋色深い山容が眺めわたせた。眼下には韮崎へ通じる一と筋の白い道を挾んで、白坂の集落の家々や田畑が、晩秋の午後にしては意外に明るい陽光に沈んでいた。
ぬいは枯草を敷いて坐ると、真面目な表情で、それらの風景に眺め入った。長い時間、そうしていた。
「くたびれたかね」
角蔵は心配になった。
「角もここにお坐り」
「紫しめじは、あっちの森の中だ」
「お坐り！」

仕方がない、角蔵も腰をおろした。
「茸なんかどうでもいいの。わたしは白坂の景色を、一ぺん自分の眼でしっかりと見ておきたかったの」
ぬいの真剣な語気につりこまれて、角蔵は「うん」と理由もなくうなずいた。
「都留郡て遠い？」
ぬいが訊いた。
「遠いな。甲府より、もっと向うだもんな」
角蔵は答えてから、口の中で「あっ」と言った。武田の重臣、小山田信茂さまは、郡内ともよばれる都留郡の領主である。角蔵は枯草に膝を改めた。
「嬢さま――」
「赤手さまってよびなさい」
ぬいが発言を遮(さえぎ)った。
「赤手さまは、本当に、小山田の侍に輿入れなさるのか？」
「そう。遠くへお嫁入りします」
「千場弥五郎という侍は、いい人だろうか」
「知りません」
「悪いやつじゃあるまいな？」
「知りません」
ぬいは厭に神妙であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com